

平和と戦争を考える
欧州スタディーツアー 2023 報告書



平和と戦争を考える
欧州スタディーツアー 2023
＜報告書＞

Overseas Study Program with Special Focus on
“War and Peace”
～ Reimagining Our Futures Together
from the Past and Present ～

2023 年 8 月 31 日 ～ 9 月 8 日

聖心女子大学2023年度欧州スタディーツアー参加学生一同

はしがき

スタディーツアーを始めて16年目にして初めて「戦争と平和」をテーマに掲げました。不穏な時代に抗おうとしたのか、時代の趨勢にどことなく不安を抱く学生達に応答しようとしたのか、自分でもはっきりした動機は分かりません。ただ、戦争と平和について根源的に考えるツアーにしたいという思いがあり、主な訪問地をポーランドやチェコにある強制収容所とも絶滅収容所とも呼ばれる「負の遺産」にしました。

第2次世界大戦時にナチ政権下でユダヤ人等の大虐殺が行われたアウシュヴィッツや1万5千人もの子ども達が収容されていたテレジンの収容所を実際に訪れる学生たちは、過去の出来事とはいえ、その場に身を置いた時に耐えられるのだろうか……。構想段階から逡巡が続きましたが、〈希望のエレメント〉を組み込むことにし、また事前学習会への参加を応募の条件にして決行することにしました。

上記の心配を抱きつつ作成した参加希望者向けのアンケートで尋ねた質問の1つが「今回のツアーでは強制収容所などの展示や説明において悲痛な現実が提示される可能性があります、よろしいですか？」という問いでした。結果は、7割弱が「大丈夫だと思う」であり、3割強が「自信はないけれど、自分の中で受けとめられると思う」でしたが、いま思えば、愚問であったと反省しています。よく考えてみれば、自分も含めて壮絶とも言える戦争の痕跡を訪れた時にどうなるのかなど、想像できないことは明らかだからです。

ともあれ、希望にも出会えるようにプログラムを設計するために収容所体験者との対話の時間を設けることにしました。調べていくうちに、収容所から生還できた方々はどなたも高齢であるために面会は不可能に近いことが分かったのですが、東京のチェコ大使館とプラハのチェコセンター本部のお力添えが功を奏して、87歳の方との対話が実現されることになりました。また、参加学生の強い要望によりUNESCO本部も訪問できることになりました。「戦争は人の心の中に生まれるものであるから、人の心に平和の砦を築かなければならない」ことを誓った国連機関を訪れ、「ホロコースト教育」や「教育の未来」の専門家による講義を受けられることになり、希望を失う旅にならないような御膳立てはなんとか整えることができました。

学期末のせわしい時期でしたが、4度の学習会を経て、8月末日、拭いきれない漠然とした不安を抱えながら「戦争と平和を考える欧州スタディーツアー」は始まりました。その後の学生たちの学びは実に深かったと言えます。ともすれば人間はとてつもないことをしてしまうということ、また絶望の淵に置かれながらも生き抜いて希望を語り続けている人がいるということ、さらにそうした悲劇を人類の課題として受けとめて生まれた組織の中で平和の実現のために働いている人がいるということなどを学び、おそらく一人ひとりが平和とは何かを自分の言葉で語れるまでに思索を深めていった -- そんな旅になりました。

たしかに、あまりに痛ましい史実に打ちひしがれることも道中しばしばでしたが、そんな私たちをエンパワーしたのは、ツアーガイドを務めて下さった方のお人柄や語りであり、収容所を後にしてから接したそよ風であり、広場で遊ぶ無邪気な子ども達であり、生還者の方からの温もりのある次世代へのメッセージでした。さらに、お礼として歌うことを決めた「上を向いて歩こう」を道すがら練習したことも救いだったのかもしれませんが。仲間がいたからこそ続けられた旅だったのだと思います。

このスタディーツアーに参加した学生に学びの機会を与えて下さった保護者の皆さまにこの場を借りてお礼を申し上げます。史実への、そして希望への導き手でもあったアウシュヴィッツとビルケナウ第2収容所の公式ガイドの中谷剛さん、この上なく丁寧にテレジンをご案内いただいた佐藤玲子さん、90歳を前に生涯忘れられない希望のメッセージを託して下さった、テレジン収容所生還者のミカエラ・ヴィドゥラコバさん、ユネスコ本部で心のこもったガイドをして下さったESD課職員の日下高德さん、同本部でご講義いただいた「ホロコースト教育」専門官のフラカパネ・カレルさんと、「学習の未来と刷新」チーム主任として未来への教育ビジョンを語られたソビー・タウィルさん、事前学習の一環として大使館（センター）でのご講義を設定して下さったチェコ大使館広報専門官のヤクブ・ヴァレックさん、私たちとテレジンの子どもの絵を出合わせて下さった「テレジンを語りつぐ会」代表の野村路子さん、そして実際に現地を訪れて感じ入ることの大切さを伝えて下さった作家・漫画家の小林エリカさんに心よりの謝意をお伝えします。

この報告書には旅のフィールドで特別なメッセージを託された若者たちの想いが綴られています。平和の継承と構築という大きな課題を前にしても、微力かもしれないけれど無力ではないことを実感している次世代からのメッセージです。ご一読いただければ幸いです。

戦争と平和を考える欧州スタディーツアー2023 世話人
永田佳之

目次

はしがき	1
目次	3
1. スタディーツアー参加者一覧	5
2. 各国の基本情報	7
2-1. ポーランド共和国	8
2-2. チェコ共和国	9
2-3. フランス共和国	10
3. 勉強会日程&参考資料	11
4. 旅程（スケジュール）	15
5. コラージュ（訪問先）	19
6. 9日間の変容・感想.....	39
7. 参加者事後アンケート結果	57
8. むすびにかえて：【邂逅】アウシュヴィッツ・テレジン	63

1. スタディーツアー参加者一覧

【学生】

2年生

岩谷舞衣 Mai Iwatani 国際交流学科グローバル社会コース

4年生

金谷奈津紀 Natsuki Kanaya 教育学科教育学専攻

佐々木綺音 Ayane Sasaki 教育学科教育学専攻

塚田紗來 Sara Tsukada 教育学科教育学専攻

大学院 1年生

神下芽衣 Mei Kamishita 人間科学専攻 博士前期課程

大学院 2年生

安藤穂乃佳 Honoka Ando 人間科学専攻 博士前期課程

【社会人】

入江彩愛 Sami Irie

【教員】

水島尚喜 Naoki Mizushima 聖心女子大学現代教養学部教育学科教授

永田佳之 Yoshiyuki Nagata 聖心女子大学現代教養学部教育学科教授

2. 各国の基本情報

2-1. ポーランド共和国

2-2. チェコ共和国

2-3. フランス共和国

2-1. ポーランド共和国の基本情報

正式名称：ポーランド共和国

首都：ワルシャワ

面積：32.2 万平方キロメートル（日本の約 5 分の 4）

人口：約 3,801 万人（2022 年 4 月：ポーランド中央統計局）

民族：ポーランド人

公用言語：ポーランド語

主な宗教：カトリック

元首：アンジェイ・ドゥダ（Andrzej DUDA）大統領（2020 年 8 月再任、任期 5 年）

政体：共和制

参考文献：外務省ホームページ「ポーランド共和国基礎データ」

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/poland/data.html#section1>（2023 年 11 月 7 日参照）

2-2. チェコ共和国の基本情報

正式名称：チェコ共和国

首都：プラハ

面積：78,866 平方キロメートル（日本の約 5 分の 1）

人口：1,051 万人（2022 年 3 月末現在、チェコ統計局）

民族：チェコ人、スロバキア人、ウクライナ人、ベトナム人

公用言語：チェコ語

主な宗教：ローマカトリック

元首：ペトル・パヴェル（Petr PAVEL）大統領（2023 年 3 月就任、任期 5 年）

政体：共和制

参考文献：外務省ホームページ「チェコ共和国基礎データ」

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/czech/data.html>（2023 年 11 月 7 日参照）

2-3. フランス共和国の基本情報

正式名称：フランス共和国

首都：パリ

面積：54万9,134平方キロメートル（本土のみ、フランス国立統計経済研究所）

人口：約6,804万人（2023年1月1日、フランス国立統計経済研究所）

民族：ケルト人、ゲルマン民族（フランク系、ノルマン系）などの混血

公用言語：フランス語

主な宗教：カトリック、イスラム教、プロテスタント、ユダヤ教

元首：エマニュエル・マクロン大統領（2017年5月14日就任。2022年再選。任期年）

政体：共和制

主要産業：自動車、化学、機械、食品、繊維、航空、原子力

参考文献：外務省ホームページ「フランス共和国基礎データ」

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/france/data.html>（2023年11月7日参照）

フランスの各村観光局公認サイト「ボン・ボヤージュ」「フランス基本情報」

https://www.bonvoyage.jp/about_france/（2023年11月7日参照）

3. 勉強会 & 参考資料

(1) 勉強会日程

- 第1回【事前勉強会】：7月7日(金)@聖心女子大学
 第2回【事前勉強会】：7月14日(金)@聖心女子大学
 第3回【事前勉強会】：7月23日(日)@聖心女子大学
 第4回【事前勉強会】：8月4日(金)@Zoom
 第5回【事前勉強会】：8月27日(日)@Zoom
 第6回【事後勉強会】：9月23日(土)@聖心女子大学
 第7回【事後勉強会】：9月25日(月)@聖心女子大学

(2) 参考資料

内容	タイトル	著者・監督	出版年	出版社
書籍	ヒトラーの正体	舛添要一	2019	小学館
書籍	悪の出世学	中川右介	2014	幻冬舎
書籍	ハンナのカバン	カレン・レビン(著)、石岡史子(訳)	2002	ポプラ社
書籍	父さんはどうしてヒトラーに投票したの？	ディディエ・デニクス(文)、PEF(絵)、湯川順夫(訳)、戦争ホーキの会(訳)	2019	エルくらぶ
DVD	意志の勝利	レニー・リーフェンシュタール	2010	
録画	テレジン	NHK		
書籍	せんそうしない	谷川俊太郎	2015	講談社
楽曲	American idiot	Green Day	2004	
書籍	字のないはがき	向田邦子	2019	小学館
書籍	真っ黒なお弁当	児玉辰春	1995	新日本出版社
書籍	せかいでいちばんつよい国	デビットマッキー	2005	光村教育図書
書籍	戦争をやめた人たち	鈴木まもる	2022	あすなろ書房
書籍	これからの「正義」の話をしようー今を生き延びるための哲学	マイケル・サンデル	2011	早川書房
書籍	生還者たちの声を聴いて	野村路子	2020	第三文明社
書籍	テレジンの小さな画家たち	野村路子	1993	偕成社

書籍	へいわとせんそう	谷川俊太郎（文）、Noritake（絵）	2019	ブロンズ新社
書籍	ぼくがラーメンたべてるとき	長谷川義史	2007	教育画劇
書籍	へいわってすてきだね	安里有生（詩）、長谷川義史（画）	2014	ブロンズ新社
書籍	おおきなかぶ	A.トルストイ、内田莉莎子（訳）、佐藤忠良（画）	1962	福音館書店
書籍	てぶくろ	エウゲーニー・M・ラチョフ（絵）、うちだりさ（訳）	1962	福音館書店
書籍	うるさく、しずかに、ひそひそと	ロマナ・ロマニーシン、アンドリー・レシヴ、広松由希子（訳）	2019	河出書房新社
書籍	戦争が町にやってくる	ロマナ・ロマニーシン、アンドリー・レシヴ、金原瑞人（訳）	2022	ブロンズ新社
書籍	アンネの日記	アンネ・フランク、深町眞理子（訳）	1986	文春文庫
書籍	親愛なるキティーたちへ	小林エリカ	2011	リトルモア
書籍	わたしは 知らない おんなのこ	小林エリカ	2021	岩崎書店
書籍	ピカソ”ゲルニカ”からのメッセージ	今村昭廣（著）、上野浩道（監）	2005	日本文教出版
書籍	夜と霧	ヴィクトール・E・フランク、池田香代子（訳）	2002	みすず書房
書籍	生きがい喪失の悩み	ヴィクトール・E・フランク、中村友太郎（訳）	1982	エンデルレ書店
書籍	死と愛	ヴィクトール・E・フランク、霜山徳爾（訳）	1961	みすず書房
書籍	現代精神の病理学	ヴィクトール・E・フランク、宮本忠雄（訳）	1961	みすず書房
書籍	『ショアー』の衝撃	鵜飼哲、高橋哲哉編	1995	未来社
書籍	ホロコースト全史	マイケル・ベーレンバウム（著）、芝健介（日本語版監修）	1996	創元社
書籍	テレジン強制収容所	<アウシュヴィッツに消えた子らの遺作展>を成功させる会（編）	1991	ほるぷ出版
書籍	トミーが三歳になった日	三ース・バウハウス（文）、よこやまかずこ（訳）	1982	ほるぷ出版
書籍	絶望の中の光	ヤン・コムスキー（画）、野村路子（編・解説）	1996	ルック
書籍	子どもの目に映った戦争	青木進々（訳）、イヴァニツカ・カタジナ、ドバス・マレク（編）	1985	グリーンピース出版会
書籍	Helga's Diary	HELGA WEISS	2013	Penguin 社

映像	独裁者	チャールズ・チャプリン監督	1940	
映像	意志の勝利	レニ・リーフェンシュタール監督	1935	
映像	民族の祭典	レニ・リーフェンシュタール監督	1936	
映像	美の祭典	レニ・リーフェンシュタール監督	1938	
映像	夜と霧	アラン・レネ監督	1955	
映像	コルチャック先生	アンジェイ・ワイダ監督	1990	
映像	4000 枚の絵 ～ユダヤ人強制収容所・子供たちの記録～	NHK ドキュメンタリー	1991 年 9 月 20 日放映	
映像	ライフ・イズ・ビューティフル	ロベルト・ベニーニ	1997	
映像	ヒトラーVS ピカソ 奪われた名画の行方	クラウディオ・ポリ	2018	
書籍	わたしはしなない	小林エリカ	2021	岩崎書店
書籍	ホロコーストを次世代に伝える	中谷剛	2007	岩波書店
書籍	アウシュヴィッツ生還者からあなたへ	リリアナ・セレグレ、中村秀明(訳)	2021	岩波書店
書籍	白バラはどこに	クリストフ・ガラーツ(文)、ロベルト・イーノセンティ(文・絵)、長田弘	2000	みすず書房
書籍	旅のネコと神社のクスノキ	池澤夏樹、黒田征太郎	2022	スイッチパブリッシング
書籍	火のトンネル	岡本央	2023	大月書店
書籍	イカロスの墜落	パブロフ・ピカソ	1974	新潮社
新聞記事	「白バラ」のソフィー再び光事			
web 記事	パリの「長崎の天使」を知っていますか？			
書籍	世界図絵	J.A. コメニウス	1995	平凡社
映像	Ein Landaizi			
映像	変身	ワレーリイ・フォーキン(監督)	2002	
書籍	NHK「100分de名著」ブックス フランクル 夜と霧	諸富祥彦	2013	NHK 出版
CD	LOU REED-TRANSFORMER			
新聞記事	沈黙の勇者たち—ユダヤ人を救ったドイツ市民の戦い—	岡典子	2023	新潮社

4. 旅程

欧州スタディーツアー							
国	月日	現地時間	都市	交通機関	行程	滞在先	
日本	08/31(木)	19:45	羽田発	飛行機 TK199	羽田空港集合		
		21:55	羽田着			機内泊	
トルコ	09/01(金)	05:15	イスタンブール着	TK1271			
		07:20	イスタンブール発				
ポーランド	09/01(金)	08:30	クラクフ	列車	市内へ		
					昼食		
		13:00		列車	ヴィエリチカ岩塩坑		
					夕食		
						リフレクション	IBIS KRAKOW STARE MIASTO
ポーランド	09/02(土)	09:00	クラクフ	バス	アウシュヴィッツへ移動		
					昼食		
		13:00	アウシュヴィッツ		アウシュヴィッツ=ビルケナウ強制収容所訪問		
		17:00		バス	帰路		
		18:00	クラクフ		夕食		
					リフレクション	IBIS KRSKOW STARE MIASTO	
ポーランド	09/03(日)		クラクフ		自由行動 ・旧市街(カジミエシュ地区) ・クラクフ歴史博物館 ・中央広場(織物会館、聖マリア教会) ・シナゴーク		
		19:00			夕食		
						リフレクション	
		22:42		クラクフ中央駅発	列車	プラハへ	
チェ	09/04(月)	07:38	プラハ駅				

コ			着			
			プラハ		ホテルにて ヴィドラコバさんへの質問確認	
		11:00			朝食・昼食	
		14:45			Jewish Museum へ	
		15:00			ヴィドラコバさんへインタビュー	
		17:00			リフレクション	
					夕食	THE GOLD BANK HOTEL
チェ コ	09/05(火)	09:00	テレジン	鉄道 バス	テレジンへ ・小要塞(元刑務所) ・ゲッターがあつた大要塞 ・ゲッター博物館 ・マグデブルク兵舎	
		18:00	プラハ		夕食	
					リフレクション	THE GOLD BANK HOTEL
チェ コ	09/06(水)	09:00	プラハ		自由行動 ・フランツカフカ博物館 ・ユダヤ人地区 ・マリオネット劇場 ・ミュシヤ美術館 ・ジョンレノンの壁 ・プラハ城 ・コメニウス博物館 ・プラハ天文時計 ・本屋さん ・シュレトウーナ通り	
		17:00			シナゴーク ・Pinkas Synagogue (ユダヤ人墓地)	

					<ul style="list-style-type: none"> ・ Spanish Synagogue ・ Klausen Synagogue ・ Maisel Synagogue 	
					夕食	
		20:00		タクシー	空港近くホテルへ	RAMADA PRAGUE AIRPORT
フランス	09/07(木)	06:30	プラハ発	飛行機		
		08:20	パリ着	AF1518	空港で荷物を預ける	
			パリ	タクシー	ユネスコ本部へ	
		10:00			ユネスコ本部訪問	
		10:30			日下職員にご挨拶 ユネスコ本部の見学	
		12:00			最上階食堂でランチ ユネスコ職員へのご挨拶	
		13:15			ホロコースト教育の講義	
		14:00			タウシル職員へのインタビュー	
		16:00			タクシー	空港へ
19:55	パリ発	飛行機				
トルコ	09/08(金)	00:20	イスタンブール着	TK1828		
		02:20	イスタンブール発	飛行機		機内泊
日本		19:25	羽田着	TK198		

5. コラージュ(訪問先紹介)

5-1. アウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所

佐々木綺音・金谷奈津紀

5-2. Michaela Vidláková さんへのインタビュー (チェコ、プラハ)

塚田紗來

5-3. テレジン収容所 (チェコ、テレジン)

神下芽衣

5-4. シナゴーク (プラハ、ユダヤ人地区)

入江彩愛

5-5. チェコのご飯とお酒

神下芽衣

5-6. 自由行動 ポーランド・チェコ編

岩谷舞衣

5-7. UNESCO 職員からの学び

安藤穂乃佳・神下芽衣

5-1. アウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所（ポーランド、クラクフ）

1940年にナチスドイツによって設立されたアウシュヴィッツ強制収容所は、今や世界的にホロコースト、大量虐殺、暴力の象徴として認識されています。今回のスタディーツアーでは、この地を訪れ、凄惨な歴史と向き合うことによって、現代社会の問題を捉え直すための多くのヒントを得ました。

<アウシュヴィッツへと送られた人たち>

今や、「ユダヤ人絶滅センター」として知られるアウシュヴィッツ強制収容所ですが、当初の建設目的はドイツ警察によって危険視されたポーランド人政治犯の収容でした。しかし、1942年からは大量虐殺のためにユダヤ人が移送されるようになりました。犠牲者の90%はユダヤ人ですが、ユダヤ人だけでなくポーランド人政治犯、ロマ、ソ連軍捕虜、障害者、反体制派、同性愛者なども殺されました。それぞれに収容者を分類するワッペンがつけられ、そのことが収容者同士の分裂を促しました。



<ガス室>

新しく収容所に連行されたユダヤ人の大半は、SS（ナチス親衛隊）の医師による選別で、労働に適さないと判断され、ガス室へと送られました。人々を安心させるためにシャワーを浴びるのだと言い、天井の穴からは猛毒の殺虫剤であるチクロンB（ガス缶）が投げ込まれました。多い時には1度に数百人が入れられ、5分~15分ほどで死に至りました。





◀◀線路に供えられた花>

アウシュヴィッツで亡くなられた方たちのお墓はありません。そのため、この地自体が「墓石のない墓地」として、ここで亡くなられた方たちの追悼の場になっています。



◀◀射殺場>

赤いバラはドイツの自動車メーカーVolkswagen 社から送られたものです。ヒトラーは当時 Volkswagen (国民車) を提唱し、自動車の増産に力を入れていました。そのため Volkswagen 社からは、毎年社員がこの場所を訪れて祈りを捧げに来るそうです。

<中谷さんのガイド>

アウシュヴィッツ公式ガイドの中谷剛さんは「ここは『材料』を持ち帰る場」だと、繰り返し述べていました。

～印象に残った言葉たち～

「教室を出て、靴を見なければならぬ」→第一収容所の展示を回っている際の言葉です。教室と現場の往還を通じて、本物と出会うことが大切であると感じました。

「命の重さは同じ、比較してはいけない」→どの国も戦争の「被害者」でもあり、「加害者」でもあります。被害者目線のみで被害の重さを競い合ってしまうですが、「被害者」も見方が変われば「加害者」であり、その二面性に気づきました。

「「便利」な階段も、車いすがやってきましたら初めて階段に上がれないと気づいて「障害」だと思ふ。当時は階段に上がれない人を「障害」とした。」→自分たちの条件に合わない人を「障害」とするのではなく、社会の「障害」を取り払うこと、言葉の定義を問い直すことが大切だと思いました。

アウシュヴィッツ収容所



学して私たちは、多くの国々や数々の協会や財団が戦争や紛争のない平和な世界を望んでいると感じました。だからこそ、現在のロシアとウクライナ、イスラエルとパレスチナで起きている悲劇に対して不安感を覚えました。



博物館はポーランド文部・国家遺産省の管轄にあり、ポーランド政府によってその活動資金が賄われています。また 20 世紀に入り、外国からの資金援助も始まりました。ユダヤ民族基金からの寄付金で博物館に専門的な修復作業室が設けられ、更にドイツやアメリカ、ロシアなどその他の国々やフランスのホロコースト記念財団を始めとする数々の協会や個人からの援助により、一部の修復工事や犠牲者追悼企画の実現も可能になりました。こちらの石碑を見

遺品部では、収容所で使用されていた物、収容所に連行された方々や処刑された方々の遺品、収容所内またはその周辺で発見された遺品を収集し保管しています。それ以外にも多くの物が博物館に寄付され保管されています。左の写真は 8 万足以上の靴の一部の写真です。

それ以外にも約 3,800 個のトランクや 12,000 個の鍋、約 40 k g の眼鏡、460 本の義手と義足、570 着の縞模様の囚人服、6,000 点の美術品（その内収容所内で

囚人たちが創作した美術品は約 2,000 点）また博物館には約 2t の髪の毛も保管されています。それらは収容所に連行された女性達のもので

遺品部へ訪れ、多くの展示物を目のあたりにして考えたことは、想像以上に多くの方が犠牲になられたということです。またナチスドイツのより、服や靴などの生活必需品すらも没収されていた事実を知り、心が傷みました。特に、約 2t の女性の髪の毛が展示されているショーケースの前では言葉が失い、泣き崩れている女性達の顔が容易に浮かびました。アウシュヴィッツ収容所で起きたことを二度と繰り返してはいけないと強く感じました。

5 - 2. Michaela Vidláková さんへのインタビュー（チェコ、プラハ）

テレジン収容所のサバイバーである Michaela Vidláková さんにお話を聞きました。



Michaela Vidláková さんは6歳からテレジンにあるゲットーで暮らしました。ゲットーとは、ユダヤ人が強制的に住まわされた居住地区です。

“Remembering cannot reverse the history, but it may help not to repeat it”

同じ歴史を二度と繰り返さないために彼女は自身の経験を語り継いでいます。ここでは、彼女から受け継いだ話を皆様に紹介いたします。

「誰か1人を責めることはできない」

アドルフ・ヒトラーは多くの人の指示を得て、首相に選ばれました。そのため、決してヒトラーだけが悪いとは言い切れないと彼女は語りました。社会全体でホロコーストは生まれたと考えることができるのです。このことから私は、社会全体で平和に向かうことができると希望を持ちました。自分たちの意見を持つことがどれほど大切か、彼女からの言葉によって強く感じました。

「一変した日々の生活」



チェコ人と平等な生活を送っていましたが、ある日突然チェコ人との境目が生み出されました。トラムに乗ることや新聞を読むことが禁止されたり、今まで仲良く遊んでいた近所の友達と一緒に遊ぶ権利がなくなったりしたのです。当時は、なぜ一緒に遊んではいけないか理解できませんでした。母に理由を尋ねると、これは戦争だからその友達に迷惑をかけてはいけないと答えました。

買い物も制限されました。買い物の時間は、15時から17時に行くことが許されていましたが、同じ時間帯に人が殺到するため、毎度1から2時間ほど並んでお店に入っていました。しかし、お店に残っているのはマスタードだけです。戦争で食料不足に直面していたこともあり、しっかりとお腹を満たせるような主要な食べ物は売っていませんでした。マスタードのみを手に入れたとしても、どのように料理をするのでしょうか。

「テレジンへ」

50kg までテレジンに荷物を持っていくことが許されました。そもそも 50kg を運ぶことは容易ではありませんが、営業しているお店がないため、本当に必要なものをよく考えました。彼女のお父さんは、大工をしていたため、持ち込みを禁止されている時計やナイフを工夫して持って行きました。成長を見込んで大きめの靴のサイズを用意した話に心を打たれました。子どもの成長を見込む親心の温かさと、用意したという靴のサイズがぴったりと合うサイズに成長するまで生きることができなかった子どもがいるのかもしれないことを想像すると寂しく、複雑な気持ちになりました。

「彼女を支えたもの」

彼女はテレジンで Girls House に住みました。友達ができて喜びました。そこでは、たくさんのプログラムがあり、飽きることはありませんでした。彼女は、ユダヤ人のリーダーシップに感謝していました。そのような中でも、苦しいこともありました。列に並んで食事を待っていると、並ぶ体力のない年老いたおばあさんたちに「スープをわけてほしい」と次々に声をかけられることがありました。そのおばあさんたちの姿から強制的に離れ離れとなり、二度と会うことのできなくなった自分の祖父母を思い出すと共に「誰にスープを渡すべきか」を考えることがつらかったのです。

そのような環境下で彼女を救ったのは、大工のお父さんが作った犬のおもちゃの「プルート」です。彼女が5歳のときにお父さんが作ってくれた世界でたった一つのもので、自分のために作ってくれたことが嬉しかったため、ずっと大切にしていました。



「彼女から私たちへのメッセージ」

Vidláková さんのお話の後、「私たちへのメッセージはありますか」と質問したところ、次の言葉が返ってきました。

「自分の屋根をしっかりと建てて、その中に“Drink”と“Food”, “Family”と“Friends”そして“Peace”と“Freedom”を持つこと。“Not anymore”それ以上は何もいらない。」

最後は、水島先生のウクレレを伴奏に、坂本九の『上を向いて歩こう』を歌い、日本からのプレゼントを贈りました。



5 - 3. テレジン収容所（チェコ、テレジン）



一見平和な公園に見えるこの場所は、「地獄の控え室」と呼ばれていました。徐々に権利を奪われたユダヤ人たちは、この場所に収容され、時期が来るとアウシュヴィッツなどに送られていったのです。

ここに送られてきた約 14 万 4, 000 人のなかで約 3 万 3000 人は病気、飢え、過労や拷問などによりテレジンで、約 8 万 8, 000 人はアウシュヴィッツなどの絶滅収容所で亡くなりました。

隔離された空間のなかで様々な制約を受け、衛生的にも問題だらけの土地で飢えと戦いながらも、大人たちは未来を信じ、子どもたちに希望を与え続けたのです。

子どもたちは親と別れて、男の子の家、女の子の家に住んでいました。学校の教室サイズの部屋にベッドをぎゅうぎゅうに置いて 40 人近くが過ごしていたのです。ベッド自体も簡易でとても狭いものでした。冬場は寒く、夏場は虫が出ました。



テレジンに収容された画家のフリードルディッカーは子どもたちに絵を描かせました。見つかったら死刑になる覚悟でした。テレジン収容所の子どもたちの絵には名前が描かれていたのです。「あなたたちには名前があるのよ。ドイツ兵が番号で呼ぼうと、豚と罵ろうと、みんなにはお父さんやお母さんが愛情込めてつけてくれた名前があるの。それを書きましょう」。絵を教えていたフリードルは子どもたちにそう語りかけたのです。

上の写真の左上の絵は右の建物を女の子の家から書いたもの。絵が黒いのは労働を終えて暗くなってから帰宅するためなのだろうか。



◀テレジン収容所の教育者たち

フリードル以外にもたくさんの大人たちが子どものため、危険を掻い潜っていろいろなことを教えていました。平和が訪れて学校に通うことになって、学年が落ちてしまわないようにと常に未来への希望を絶やさなかったのです。勉強は基本的には禁止させられていたため、見張りをつけて行われていました。見張りが口笛で合図をしたら勉強は中止されたのです。

テレジン収容所で発行されていた雑誌▶

また映画以外にも部屋ごとに雑誌を発行させていました。暮らしの中で楽しみを見つけること、工夫して発信させることで、閉鎖的な社会の中でも自らに価値を感じることができたのではないのでしょうか？どの雑誌もクオリティーが高く、手書きとは思えないものでありました。



自治会という制度があり、ユダヤ人がテレジン内の自治を任されていました。人々がよりよく生きられるように自治をすると同時に、ナチスに言われた人数を絶滅収容所に送るため、人を選ばなければならないこともあったのです。

アウシュヴィッツ、その他収容所に続く線路▶

選ばれてしまった人々はこの線路を使って、アウシュヴィッツなどに送られていき、帰ってくることはありませんでした。



5-4. シナゴグ（プラハ、ユダヤ人地区）

シナゴグとは、ユダヤ教の会堂のことです。シナゴグは英語で“synagogue”と表し、ギリシャ語の集会所を意味する“シュナゴグ”に由来します。今回のスタディーツアーではチェコにある“Prague Jewish Town”に点在するシナゴグ・セレモニーホール・ユダヤ人墓地を訪れました。このうち、旧新シナゴグはヨーロッパでも最古のシナゴグの一つであり、プラハの主要なシナゴグです。最も印象的なものはピンカスシナゴグで、ここには世界最古のユダヤ人墓地が保存されています。またシナゴグ自体がホロコーストによって亡くなった方々の記念碑としての役割を持ち、テレジン強制収容所の収容者たちによって描かれた絵が複数展示されています。

ピンカス・シナゴグ（チェコ語：Pinkasova Synagoga）



↓シナゴグからは、世界最古の旧ユダヤ人墓地へアクセスすることができます。写真にあるように、木に覆われた静かな土地に、墓石が所狭しと並んでいました。墓石が乱立しているのは、墓地の土地不足のためといわれています。古い墓石の取り壊しはいかなる理由でも許されないのがユダヤ教の考え方であり、新しい墓石は古い墓石をかき分けるように（または埋め立てて）おかれていたため、墓地の姿がこのようになったのだとか。



↑ピンカスシナゴグは、1535年に建設され、旧新シナゴグに次いで古いものです。1990年代ごろから、シナゴグ内部の壁にホロコーストの犠牲となった方々の名前が書き連ねはじめ、現在は全ての壁に刻まれています。



旧新シナゴグで観覧チケットを購入すると、観覧できるシナゴグの地図をもらうことができます。

各所で展示が充実しており、見所が多いため、ゆっくり歩いて全てを見てまわると3時間程度の時間が必要でした。

またツアーや学生の団体も多く見学に来ているので、どこも混んでいる印象でした。

子どもたちの絵画



↑ピンカス・シナゴグの2階にはテレジン収容所に収容されていた子どもたちによる、数多くの絵画や作品が展示されていました。絵画とともに、描いた人の名前と生年月日、その子どもが亡くなった日（または生存しているかどうか）が細かく記録されています。

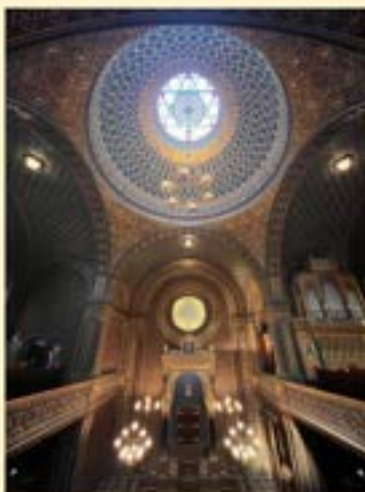
➡子どもたちが「明日への希望、生きる希望」を持ち続けられるよう、<子どもの家>に通って絵の教室を開いていたのが、フリードル・ディッカー先生です。子どもたちの細かい記録が残っていたのも、フリードル先生が子どもたちに、自分が描いた絵に名前を書くよう伝えていたからでした。



フリードル・ディッカー

フリードル先生がテレジン収容所へ送られるとき、一家族50キロの荷物だけを収容所に持っていくことが許されていた中で、彼女は自分の持ち物を減らし、ありったけの紙や布を集め持って行ったそうです。またその紙や布の一部は絵の具でさまざまな色に染めていたそうです。アートセラピーも教えていたフリードル先生は、収容所で子どもたちと出会うことがあれば、その色付きの紙や布がきっと役に立つはずだと思ったのでしよう。

そのほかのシナゴグ（スペイン／クラウゼン／マイゼル）



➡ **スペイン・シナゴグ**（Španělská synagoga）。ほかのシナゴグに比べて、圧倒的に内装が華やかでした。内装はスペインのアルハンブラ宮殿をイメージしているようで、なぜスペインにまつわる装飾がなされているのか、その理由は15世紀ごろまで遡ります。15世紀ごろ、ユダヤ人がスペインから追い出されるということがありました。追い出されたユダヤ人たちは、ブラハのユダヤ人地区の別の建物にしばらく避難していた時期を経ています。次第に避難場所が手狭になっていく過程で、このアルハンブラ宮殿をイメージしたシナゴグが建設されたといわれています。実際に、金色や黄色を基調としたモザイク柄が太陽光や電球のあかりに照らされている様子や、シャンデリアのかかる会堂は、教会というよりも宮殿のようなイメージでした。ちなみにこのシナゴグは、最近に建設されたものです。

クラウゼン・シナゴグ（Klausová Synagoga）。クラウゼンとは、ドイツ語で「小さい」を意味します。内部ではユダヤの伝統や習慣に関する展示が行われていました。ユダヤ人のセレモニーホールが隣接しており、そこは遺体安置所と埋葬の手伝いをする役割をしていたそうです。

マイゼル・シナゴグ（Maiselova synagoga）。クラウゼンシナゴグも含む、ユダヤ博物館の1つであり17世紀の大火災を経て幾度も立て替えられながら残っているものです。内部では金細工や織物などの展示が行われています。

5-5. チェコのご飯とお酒

チェコと言えばビールが有名ですね。国民一人当たりのビール消費量が世界一多いチェコ。20年以上もその座をキープしています。一人当たりの年間消費量は約140リットルにも及ぶと言われていています。というのも、チェコの人々はピルスナー・ウルケルなど地元で作られたビールは不純物が含まれていないため1日1杯飲めば健康になると言います。チェコビールは、日本のビールよりもコクのある味わいが特徴です。プラハにはビール博物館もあり、そこでは展示を見た後に4杯のビールを出してくれます。蜂蜜のビールやベリーのビールなど、いろいろなビールを楽しむことができ、お得感がありました。



チェコで有名なのはビールだけではありません。薬草でできたリキュール、ヘベロフカも人気があります。お土産として買う人も少なくありません。この酒は100%自然原料で保存料、着色料等は使っていません。アルコールの度数はとても高く、私も飲んでみたのですが飲んだ後から涼しいレストランの中にもかかわらず汗が止まらず暑くてしかたなくなりました。地元の人々は冬の寒い日にはこのお酒を1口飲んで体があたたまってから出かけるそうです。

このお酒、そのままだと苦味や癖がありますが、食べものの旨味を引き上げる力があると感じました。チェコの郷土料理のパンに入ったシチュー「グラージュ」と間違えて頼んでしまった、オニオンスープのようなものがあったのですが、人生で食べた汁物の中で一番美味しかったといっても過言ではないものでした。このスープにヘベロフカがとても合いました。このお酒を飲んでシチューを食べるとニンニクの効いたスープの香りがより喉で広がるような感じがしました。





チーズフライというビールに合わないわけがない
地元料理もありました。

結局グラーシュも頼み2人で3人前を平らげまし
た。国内でもチェコ料理が食べられるお店はいくつ
かありました。チェコ大使館がチェコの飲食を堪能
できるお店としてホームページに掲載しているので
ぜひご覧ください。

5-6. 自由行動 ポーランド・チェコ編

ポーランド：ヴェリチカ岩塩抗 クラクフ駅からまでの約30分間、私たちは電車で揺られてヴェリチカ岩塩抗を目指しました。13世紀から1996年まで岩塩が採掘されていたヴェリチカ岩塩抗は1978年に世界文化遺産に登録され、現在は観光地になっています。ヴェリチカ岩塩抗はハンガリーのキング王女がポーランド大公との結婚を拒んで婚約指輪を祖国の岩塩抗に投げ捨てたことがきっかけで事業として拡大したという説があります。偶然にも王女が捨てた指輪はポーランド

のヴェリチカ村の小さな岩塩抗で見つかったのです。その話に心を動かされたポーランド王家が小さな岩塩抗を掘り進める事業を進めたことで、巨大な岩塩床が発見されました。岩塩抗の中の王家の像や有名なシャンデリアはもちろん、観光客が歩いている床さえ塩でできており、私は圧倒されました。また当時働いていた抗夫たちは棒の先に火薬を付けて付近の岩石を爆破することで採掘することもあり、危険が伴う仕事をしていました。物語性のある王家の話と、必死に働いた労働者の歴史、そして圧倒的なスケールの景観を楽しむことができる素晴らしい場所だと思います。



チェコ：コメニウス博物館



博物館では主にチェコの教育の歴史と授業形態の変遷について豊富な展示とともに学ぶことができます。博物館の名前にもなっているコメニウスは教育学の先駆者の1人で、『世界図絵』という世界初の挿絵入りの教科書を出版した人物です。教科書に図や絵が入るという進歩は学習者の勉強の理解度を高めるだけではなく、外の世界を知るきっかけとして革命的な出来事でした。私たちは様々なツールを通して国外のみならず宇宙のことまで知ることができますが、印刷技術が登場し始めた時代の17世紀に外の世界を知ることができるようになった変化は劇的であったと言えるのではないのでしょうか。またコメニウスは感覚的な概念から抽象的な概念への理解に繋がると考えて知識の大衆化に影響を与えた学者であり、その考え方は広く受け入れられ、『世界図絵』はヨーロッパに広く流布しました。



アウシュビッツ・ビルナケウ強制収容所という悲憤の歴史を持つ跡地から始まったスタディーツアー。その旅の締めくくりとして私たちが強く要望したバリの UNESCO 本部では、職員であるカレルさんとタウィルさんから機関の果たす役割や教育が担う力などについて、ご教授いただく機会を得ました。ここでは、2つの講義の要点をそれぞれ簡単にご紹介したいと思います。

ホロコースト (holocaust) と市民性教育 (citizenship) ::::::::::::::::::::::::::::::

「ホロコースト教育」専門官のフラカパネ・カレル (Karel Fracapane) さんからの講義では、ホロコーストの要点と市民性教育の重要性について、お話していただきました

① ホロコーストとジェノサイド研究

ホロコーストに関する研究は比較的若いと言われているようです。1970年代まで、アウシュビッツ・ビルナケウ強制収容所をはじめとした施設の地域は旧ソ連領であったため、当時に起きていた出来事が調べられませんでした。ソ連崩壊後の1990年代以降に、研究のブームが起これ、ポーランドやハンガリーなどユダヤ人が居たところの歴史が掘り起こされたそうです。

これまで集団虐殺 (genocide) は、30~40カ国で行われてきたと想定されているものの全ての記録は取られておらず、受け継ぐ必要があるが、歴史の修正も行われています。場所を問わず虐殺や大虐殺は、メカニズムが似ており、ヘイトスピーチやナショナリズム、偏見、差別などによって排除に至ります。これに対して、カレルさんは、これは人類の普遍的な現象の可能性があり、だからこそ対応しなければならないと、お話してくださいました。

② 過去との和解と市民性教育

そして、その対応策として重要なのが教育であり、とりわけ市民性教育の重要性を指摘していました。

- 現代社会の人々と明日の人々を守るための教育
- なぜ起こって、道徳的に・経済的にどのような結果になったのか理解する

上記2点を踏まえて、よくない結果 (consequence) をどうするか、いかに記憶し、同じ過ちを繰り返さないよう予防するか、が教育の課題であると述べていました。このような過去との和解のプロセスをつくることで人々は、前向きに歩んでいく可能性があるのではないかと加えています。

③ UNESCO での活動と使命

ユネスコのネットワークでは、虐殺に関する情報を共有しており、過去の調査だけではなく、これから大虐殺の危険性が高い地域も明らかにしています。

ほとんどの場合、被害者には声はなく、私たちは、それを忘れてしまいます。そのため、歴史の中で、これらの出来事を考察することが重要なのかについて意識を高めることにより、市民に役立つ活動

としてだけでなく、どのように和解をするのか、あるいは、自らの暴力的な過去にどう対処する、について理解することでもあり、教育機関の果たす役割についても示してくださいました。

未来の教育：「再想像」する力とは？ ……………

「学習の未来と刷新」チーム主任のソビー・タウィル（Sobhi Tawil）さんからの講義では、UNESCO の最新報告書『私たちの未来を共に再想像する：教育のための新たな社会契約』（2021）と関連する、これからの未来に重要な教育の要素について、お話していただきました。

① 3つの時間軸におけるアクション

3つの時間軸（短期的なアクション（A）、中期的なアクション（B）、長期的なアクション（C））の性質のそれぞれと「緊急事態への応答」（emergency response）を照らし合わせることで、「再想像」する力について説明してくれました。3つの時間軸についての具体例は下記の通りです。

- A) COVID-19 によって多くの子どもが学校へ行けなくなり学習の保証を取り戻すために、緊急措置としてITなどを駆使した各国の単発的な対応
- B) IT化への対応やグローバル化への備え、少子高齢化への対策などの社会の要請への改革
- C) 気候変動やパンデミックといった人類存続の危機（existential threat）を前に、より良い選択をする判断（existential choice）が求められている現代社会での捉え直し

三つ目は存続自体が脅威に晒され続ける状態であり、まさに現在の私たちの課題でもあります。そのような今後も続くであろう脅威への応答として、教育のあり方や成り立ちそのものを考え直す必要に迫られており、そのために必要なのが「再想像」という力であると、タウィルさんは述べていました。

カレルさんとのセッションにて



② 3つの時間軸と「再想像」

それでは、3つの時間軸と「再想像」を照らし合わせたらどうなるか、について共有します。

- A) 「想像」などに老けている暇はない。なぜなら、緊急事態の時は目の前のことに即座に応じることで手一杯のため。
- B) ある程度の「想像」が求められる。なぜなら、改革のためには、人々が満足する教育になるであろうという予測（想像）を立てる必要があるため。
- C) 「想像」では不足の場合がある。なぜなら、人類存続のための対応とも言えるため、危機に応えるためには、より強い「想像」力、つまり「再想像」が求められるため。

教育では、二つ目のような10年後の改革ではなく、30年先、いや100年先の人類や地球をイメージして、このまま歩いていったら直面するであろう行く末を丁寧に再考していくことが期待されています。

③ 「再想像」を活かしていく時代

教育で想像力を高めようとする時、通例は、自分から家族、学校、街、県、国、地球、宇宙というような同心円的に思い描くスタイルです。しかし、「再想像」を考えた場合、必ずしも伝統的な方法である必要はなく、逆のアプローチをとっているインドのNGOを興味深い例として挙げていました。銀河系から始まり、太陽系、地球、地域・・・そして自分へ。

加えて、タウィルさんは、私たちは色々な手法を用いて「再想像」を生かしていかなければならない時代に生きている、と語ってくださいました。



タウィルさんとの集合写真

ユネスコ本部



文化の中心地フランス・パリにあるユネスコ本部の中には貴重な美術作品がたくさんあります。そのうちの一部をご紹介します。

●ユネスコ本部庁舎

ユネスコ本部庁舎は 1958 年に完成しました。1985 年は東京タワーが建てられた年です。天井の高さやタイルの色合いからかなり歴史を感じました。

ユネスコ本部の敷地はかつてルイ 15 世の騎兵隊の兵舎だったといわれています。

●瞑想の空間

日本の建築家、安藤忠雄氏 (1941-) の作品。

日本の民間からの寄付金により 1995 年に建築されました。日本庭園の横にあり、33 平米のコンクリートの円筒状の構造をしています。床に使用されている御影石は、広島原爆で被爆した原爆ドーム近くの橋のもの。





●日本庭園

日系アメリカ人、イサム・ノグチ氏(1904-1988:父は日本人、母はアメリカ人)の作品。日本政府の寄付により1958年に建設されました。総面積1,700平米の敷地の中に、建設当時日本から持ち込まれた桜、梅、椿、竹などの樹木、80トンもの大小の庭石、小川、池、橋、季節の花々が配置され、自然と人類の調和を表現して

います。

入り口部分の滝は、岩に刻まれた模様が水に映ると「和」という字に見えるため、「和の滝」と呼ばれています。

●長崎の天使

天使の頭像は、元々、長崎の浦上天主堂の正面にあったもので、1945年8月9日の長崎への原子爆弾の被害を奇跡的に免れたもの。1976年、ユネスコの30周年を記念して長崎市より寄贈されました。



●寛容の広場

イスラエル政府の寄贈により 1996 年にイスラエル人キャラヴァン氏の手によりつくられました。ユネスコ憲章前文の有名な書き出し「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」が 10 の異なる言語で彫り込まれた石碑と、オリーブの木が配置されています。アラビア語とヘブライ語が隣同士で書かれています。



●イカロスの墜落

パブロ・ピカソの 1958 年作の壁画。第 1 会議場前のホールの 80 平米の壁全面を覆う 40 枚のパネルから構成されています。ピカソによれば、泳いでいる人々をモチーフにしたとのこと。壁画の前方上部に太い梁があり、鑑賞の邪魔となるためか、ピカソは壁画の設置場所が気に入らず、壁画には署名しなかったと言われています。



●第一会議場
ユネスコ内最大の会議場で、
座席数 1,350 席



●アルベルト・ジャコメッティの彫刻
エントランスホールに置かれたジャコメッティによる代表作。ここにある作品の中で最高額のもので、ユネスコでは困ったらこれを売ろうということになっているとか・・・

5. 感想

入江彩愛 『「戦争と平和を考える欧州スタディーツアー」に参加して』

岩谷舞衣 「2023年欧州スタディーツアーに参加して」

金谷奈津紀 「一步踏み出すことの大切さ」

佐々木綺音 「未来への責任」

塚田紗來 「問い」

神下芽衣 「平和の脆さ、戦争の身近さ」

安藤穂乃佳 「本物と出会う姿勢を持つということ」

「戦争と平和を考える欧州スタディーツアー」に参加して

入江彩愛

ずっと遠くの、ポーランドという国にあると思っていたその空間が、唐突にくっきりとした体積をもって目の前に現れて、しばらく私はその空間との距離感をうまく掴めないうでいた。日本人ガイドの中谷さんが柔らかい物腰でもって案内をスタートさせてくださってもなお、距離感をうまく掴めず、ピントの合わないレンズを覗き続けているような、ガラス越しの世界を見ているような、現実の中でその空間と対峙している感覚に、どうしてもなれないでいた。そのためなのか、高揚感と冷静さを行ったり来たりする、落ち着かない感情が纏わりついたまま、私の「アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所」の見学は始まった。私は、犠牲者の方々の名前が静かに響くなか、収容所の奥へと続く、長く真っ白い廊下を、落ち着かない気持ちと共にひっそりと歩きはじめた。

廊下を抜けると、音声によるガイドがスタートすることを告げられた。周囲の他のガイドに混ざらずに中谷さんの声が聴こえるよう配られたヘッドフォンからは、確かな意思をもった声が私に届けられた。その場で唯一、耳に聞きなれた日本語は、自分にぴったりと寄り添ってくれているようにも感じた。

しばらくの間、その声に誘われて強制収容所の中を歩いてまわっていると、やがて、強制収容所の空間が私の現実の世界と重なりはじめた。レンガの壁・建物・窓・有刺鉄線・木製の寝台が並ぶ部屋・囚人用トイレ・並木・錆びた線路・窓のない滑車、そして足元に広がる砕かれた石のようなものが見える道など、「当時造られたものが、今、ここにある」ということがようやく感じられるようになった。

歩いてまわってどれくらいの時間が経っただろう。見学も終盤に差し掛かったころ、巨大なガス室の造りがよく見える場所に辿り着いた。爆破された跡は残るものの、人間が一度に数百人は入れるかというほどの広さや、地下に埋め込まれた頑丈な

建物の造りからは、「やり遂げなければいけない」と言わんばかりの頑なな意思が滲み出ているようで、異様な存在感を放っていた。あまりの異様さに思わず寒気を覚えたのと同時に、そのとき確かに感じた“地響き”は、日本に戻った今でもはっきりと思い出せるほど鮮明だった。くるぶしにまでも感じる強い“地響き”の正体は、ガス室に閉じ込められた何百人もの収容者たちの思いなのか、亡くなる直前まで上げ続けた声が聴こえたからなのか、それはわからない。



写真1 真っ白い廊下



写真2 巨大なガス室跡

もちろん、本当に地響きが起こっていたわけではないが、すでに私がその時に対峙していた光景は、距離感が掴めなかった最初のものとは全く異なるものへと変容していた。

アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所での体験は、ゲットー博物館やテレジン地区でもあった。その場所は、人類史上類を見ないほどの規模で、人間の尊厳を丸ごと打ち砕く出来事があった空間であるはずなのに、その場所に来てみるとどこか整然としていて、はじめのうちはそれが逆に現実味を欠いてみせていた。けれども、事前に学んだ知識の隙間を埋めるような言葉が、パズルのピースのようにカチカチと揃っていくと、ふとした瞬間に、全体が全く違う光景となって目の前に広がっている、という変容の体験である。

* * *

そのほかの行程を振り返ってみても、訪問先の各所において変容を目的としたスタ
ディーツアーに相応しい、大変貴重な学習ならびに経験をさせていただいたと思いま
す。

共に旅をして出来事を共有した6名の学生と、旅の間に出会った全ての方に感謝を
お伝えいたします。そして、スタディーツアーをデザインし、貴重な経験の機会を与
えてくださった永田佳之先生および水島尚喜先生には、心からの感謝を申し上げま
す。

2023 年欧州スタディーツアーに参加して

岩谷舞衣

戦争と平和という大きな言葉は何を意味しているのだろうか。ツアーのための事前学習を重ね、この2つの言葉が一緒に使われていることと、歴史を学んだり報道で見かけたりするだけでは追いつくことができない言葉だという感覚が強くなっていった。2022年4月に開戦したウクライナ・ロシア戦争やアフガニスタン戦争など、規模の大きい戦争は2023年10月現在も続いている。同じ世界で起きている脅威に対し、なぜ私は差し迫って考えることができないのか。私が生きている社会は平和であると思いついでいるためか。

ツアーで多くの体験をさせていただいた中で、少しずつ世界の見え方が変わってきた。伝えたいことはいくつもあるが言語化できる中では、視点の偏りに気づくことと平和維持ではなく平和構築の重要性を知れたことをここに残したいと思う。

視点の偏りというのは、戦争の事実が語り継がれるとき、その伝えられ方は必ずしも中立的なものではないということだ。例えば、被害者側からはその戦争がいかに悲惨だったか、相手国がいかに残酷であったかということが強調されて見えやすい。例えばアウシュヴィッツ博物館では敢えて強調するつもりはなくても、収容された人がどのように扱われていたかということが多く取り上げられ、そこで起きたことの問題はどのような問題であったかという根本には注目しにくいと気づくことができた。事実、アウシュヴィッツ・ビルケナウ博物館はその設立に際し、歴史を語る場か犯罪システムの研究所にするか意見が割れた背景が存在する。しかしその両者のバランスを取ることは難しい課題のように見える。

そして戦争をしてはならないということを伝えるには、戦争を構造的に捉えることも必要だと学べた。今生きている多くの人々、そして将来世代にとって戦争は身近なものではない。だからこそ単に歴史から「戦争はいけない」と議論の余地もなく戦争

を抑止しようとする方法は現実的ではないように思う。私も学習する前は、戦争を自分ごととして考えることに限界を感じていた。しかし、平和が当たり前ではないことに注目してはどうだろうか。UNESCO でホロコーストの講義を受けて知ったのだが、将来的に大虐殺が起こるかどうかの研究も新しい分野としてされているそう。つまり、戦争はリスクとしても考えるべき問題であり自分は無関係だからと言い切ることはできないだろう。戦争を自分事として話をするには、戦争を構造的に捉えて伝えるような教育が不可欠だと感じた。

私はツアーで得ることができた持続可能な平和構築という知見をどう活かすか日々考えていたい。もちろん、自身は平和学習の体験者という視点を持ち合わせていることを自覚したうえでまずは経験を周囲に話したり勉強会に参加したりする予定だ。

一歩踏み出すことの大切さ

金谷奈津紀

8月31日から9月8日までの9日間はこれまでにない、私に多くの学びをもたらしました。また、「生死」について時間をかけて考えた日々であり、私のこれからの人生に大きな影響を与えるであろうと感じた時間でした。更に、帰国後も現在の選択肢に溢れている生活やこれまで当たり前だと思っていた日々大切さに感謝するようになりました。「明日は何時に起きようか」「明日は友達とどこで待ち合わせをして何を食べようか」「今日は何時に寝ようか」など私の日々の生活には選択肢が溢れています。しかしこれまでの自分は、選択肢のある自由な日々感謝する気持ちが欠けていたのではないかと感じました。帰る家があること、待っている家族がいること、悩みを打ち明けることのできる友達がいること全ての環境に感謝をしなければならぬと感じました。

沢山の学びを得ることのできたスタディーツアーの中で特に印象に残ったことが二つあります。一つ目は、ヴィドラコバさんへのインタビューを通して受け取ったメッセージです。

「私達に伝えたいことはありますか」の質問に対して彼女は、「過去の責任を貴方達が背負うことはない。しかし、これからの未来の責任は貴方達にある。平和と自由を手に入れなさい。」とメッセージを残してくれました。私はこのメッセージを受け取り、正直少し気が楽になりました。理由は今回のスタディーツアーを通して、多くのことをインプットし、帰国後アウトプットして一人でも多くの方に平和の尊さや同じ過ちを繰り返してはいけないということを伝えていかねばならないと過度な気を張っていたからだと思います。しかし彼女のメッセージを通して、アウシュヴィッツやテレジンで起きた出来事を自分のペースで少しずつ現実を受け入れていければいい。無理に受け入れる必要はない。時間をかけてインプットし、アウトプットしていけばいい

いのだと考え直すことができました。未だに強制収容所で起きた悲惨な現実を受け入れることができないのが本音ですが、起きたことを正しく理解した上で他人事ではなく、自分事として考え、これからの未来で同じ出来事を繰り返すことのないように責任を持って行動することが大切だと感じました。

二つ目は、テレジンの子ども達の絵です。様々なことが規制されていたテレジンの収容所でしたが、唯一子ども達に許されていたのは歌や絵などの芸術活動であり、大人は子ども達に希望をもたせるためや元気づけるために教育に力を入れました。子ども達の絵には大きく二種類ありました。一つは、子ども自身が今感じていることや思い出です。もう一つは、テレジンの当時の様子、子どもが実際に目にしたものです。プロパガンダの一環として、許されていた芸術活動でしたが、子ども達に与えられた唯一の癒しの時間、自由な時間だと私は感じました。芸術活動の時間ですらも、制限されていたら子ども達は何を糧に生活していたのか、どんな人間に成長していたのだろうかと考えるだけで少し恐怖感を覚えます。スタディーツアーを通して、私は沢山の学びを得ることができました。この経験は今後の私の人生に大きく影響すると思います。

未来への責任

佐々木綺音

ツアー参加前、私は「アウシュヴィッツへはいつか行かなければならない」と感じながらも、なかなかその踏ん切りがつかずにいました。そんな時、ちょうど本学で野村路子さんの講演会に参加する機会があり、「あなたたちはもう知ってしまった」、そしてその後直接お会いした際の「知る勇氣、伝える努力」という言葉に背中を押されて、このツアーへの参加を決意しました。それからは、野村さんの著書や、以前に読んだことのある『夜と霧』を読み直しながら、思いを馳せ、準備を進めていきました。

しかしツアー全体を通して、正直現地では、なかなかその場所へ来たという実感が持てずにいました。テレジン収容所のサバイバーであるヴィドラコバさんへのインタビューで、「私たちに求めるものは何か」という質問を学生からした際、彼女の口からは「あなたたちが過去の責任を負う必要はない」という言葉が返ってきました。その日私は、「彼女から平和への責任を引き継ぐんだ」という思いで行ったので、予想外の返答でした。「なぜ私は今、ここにいるのか」「責任は本当はないのだろうか」「平和とは」「戦争とは」、ツアー中は彼女の言葉だけでなく、毎日が考えることの連続でした。

帰国後、数日かけてツアーを振り返り、本を読み返し、ごちゃごちゃになった頭を、少しずつ解きほぐしていきました。今でも「答え」は出ていないことの方が圧倒的に多いのですが、一つ、最終的に自分の中に落ち着いたのは、「過去の責任はなくても、現在と未来に対する責任はある」ということです。すでに過去に起こったこと、その事実を変える術は私にはありません。ですが、それを「自分とは関係のないこと」として捉えることも違うはずです。私の信条ですが、「関係ない」と初めから捉えていたら、それはそこで終わりになります。逆に、「関係ある」と思っただけで考えれば、そ

れは全て自分につながるのだと思います。私たちは単に歴史を学びに行ったのではなく、過去から現在と未来を考えるために、クラクフ、プラハ、そしてユネスコを巡る旅をしました。私たちがあの過去を受け止め、現在と未来への責任を果たしていくことが、過去に対しても唯一できることなのだと思います。

このスタディーツアーの中で、私たちは多くのキーワード、平和へのヒントを得ました。アウシュヴィッツ公式ガイドの中谷剛さんは度々、「ここは材料を持ち帰る場所です」と言っていました。アウシュヴィッツや中谷さんのガイドだけでなく、テレジンの子どもたちの絵、子ども「些細」で「大切」な日常を守った大人たち、ヴィドラコバさん、ユネスコ職員の方々、そのすべてから私は平和への種を持ち帰ってきたのだと思います。私はこの平和の種をどこで、どのように、蒔いていけるのだろうか、どんな花を咲かせることができるのだろうか。思考を止めないこと、そして持ち帰った種をその時々で、自分できる形で蒔き続けることで、私は未来への責任を果たしていきたいです。

問い

塚田紗來

「考え続けて意見を持つことは平和に繋がると、心にとめて生きていきたいです」。これは、「どのようにしたら平和を築くことができるのか」という個人的な問いに対して得た私なりの一つの答えです。

この度のスタディーツアーに参加するにあたり、歴史的な視点から大量虐殺の実態を学ぶことができました。今まで小学校や中学校の歴史の授業で詳しく学ばず、さらには自ら学ぼうとしなかったことから、まだ知らない多くの事実があり、毎度それらの事実を受け止めることに努めました。物や家、名前や自由を取り上げ、強制的に人間としての生きがい、そして命を奪った事実は特に今後も心に残り続けるでしょう。このように学びを深める度に「平和」への問いが大きくなりました。

そして平和についての疑問が頭の中で整理されないうちにスタディーツアー当日となり、あっという間に実際に自分の目で事実を受け止める時間となりました。スタディーツアーのプログラムの中で私が最も緊張して挑んでいたのは、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所です。そこでは、日常生活では出会わない衝撃と不条理さを強く感じるのではないかと想像していたからです。

実際に訪れて得た一つの考えは、社会全体で差別と分断が生まれたことから大量虐殺が引き起こされたと考えることもできるということです。多数派に流されないように多角的な視点を踏まえて自分の意見を持ち、社会全体へと向き合うことが必要であるのです。「誰か一人が悪いわけではなく、社会に問題がある」というツアーをガイドしただけの方の言葉が印象に残っています。現代においても、様々な場面で差別が生まれています。私は、この差別は一人ひとりの意識によって無くすことができ、それが平和へと繋がるのではないかと考えるようになりました。自分の意見を持たずに

多数派に流れることは気楽である一方、社会を築く上では最も危険なことだと思います。日頃から自身の視野を広げられることが必要不可欠です。

このように私は、考え続ける時間を大切にして意見を持つことは平和をもたらせることができるようにしたいと考えています。では、「平和」とはどのようなことを示すのでしょうか。これは私にとって次の問いです。答えを見出すには長い年月がかかるかもしれませんが、この問いに出会えたことに感謝して考え続けたいです。

平和の脆さ、戦争の身近さ

神下芽衣

今回のスタディーツアーで平和の脆さ、戦争の身近さを感じざるを得なかった。誰もが世界と協力し平和を目指しながら均衡を保たなければ、どこでも戦争は起きてしまうだろう。印象的だったキーワード4つとともに感想を述べる。

・色々な文化に触れること

ナチスは身近で多数派なるものを守るためにホロコーストを起こした。また、彼らは優生思想であり、金髪碧眼で高身長のアリア人かつ障害がなく異性愛者であることを善とした。よって、ユダヤ人等を犠牲にし、虐殺にまで発展した。私達は物心ついた時から「なんで〇〇ちゃんの髪の毛は金色なの？」と一人一人を様々に区別しジャンル分けして来た。自分と遠いものに違和感を抱くことは成長過程で避けられないものである。しかし、異なる人々と触れ合い共存し、それが身近でありふれたものになれば排他的な考えは失われていくはずだ。

・責任の所在は誰にあるんだろう

ユダヤ人は商売や金融業についているものが多いため裕福であると同時に歴史的に差別をされて来た。差別の対象が自分より権力を持っている状況は脅威なはずだ。同時に罪悪感も生まれてくる。罪悪感は攻撃に変換される。最近ドイツでは右派政権が力を持ち始めた。いつまで謝罪意識を持ち移民を受け入れなどの慈善活動をしなればいけないのか？今やEUの経済を支える筆頭でこのようなことをしなくても国際社会で孤立しないのではないか？という意識から支持が拡大されているのではないかと感じる。

アメリカでの黒人差別が続いているのも罪悪感と恐怖心によるところが多いと感じる。ならば差別や奴隷貿易などの歴史的事実を忘れてしまえばいい。しかし過去は知

るべきだというのがツアーで出会った方々の共通の認識であった。なぜなら責任はその出来事を起こした国の国民にある訳ではないからだ。たまたま生まれた国、人種によって決まるはずがない。私が日本でドイツ人との子どもを産んだら子どもはドイツ人としても日本人としても責任を取らなくてはならないのか？あるいは、私がアメリカ国籍をとったら、責任から逃れられるのか？そんな話ではないはずである。

日本も真珠湾攻撃やアジアの支配に対して罪悪感を持たされ続けて来た。しかし攻撃させてしまったのはどうしてだろうか？江戸時代に不平等条約を結ばされたこと、宗教差別によって国を追い出されたこと。遡ってみれば途方もないし、原因は1つではない。被害者はシンプルな理由を探し、加害者になり続けている。ロシアが戦争をしなくてはいけないのはなぜか、自分たちに責任はないかを考えながら制裁を課さなくてはならない。

・高度な教育で平和な社会を実現することは可能なのか？

このツアーで高度な教育をしていれば戦争が起こらないと思っていた私の幻想は砕かれてしまった。大戦前ノーベル賞を一番多くとっていたドイツ、外国人も雇いながら高度な教育をし、識字率が非常に高かった日本。どんな国だって経済的に厳しくなれば、戦争という手段を選択するかもしれない。平和は世界中で政治、経済、衛生など全ての分野が一堂に会し目指さなければ実現しない。そして人々も屋根があり、家族と友達、人数分の食事と笑顔がある、ありふれた毎日続けることを懇願しなくてはならない。

・無駄なものってなんだろう？

アウシュヴィッツでは無駄をなくそうと人毛でさえ有効利用しようとしていた。しかし人生を無駄なく最短でゴールしようと思うなら生まれない方がいい。約 100 年の人生、自分が楽しく生きる以外に目的はあるだろうか？効率ばかり考え始めた時点でお

そらく貧困や戦争に差し掛かっているはずである。大学院に行く 2 年間は側から見ると無駄に見えるかもしれない。文系は大学院に行ったところで就職先はそれほど変わらないし、学んだことを仕事で使わないかもしれない。それでも、学んだおかげでつまらないと思っていたものが楽しくなり今、以前より人生が楽しい。この無駄こそが今、広く求められているリベラルアーツなのではないだろうかと思う。

本物と出会う姿勢を持つということ

安藤穂乃佳

今回は、ポーランド共和国のアウシュヴィッツ＝ビルケナウ絶滅強制収容所から始まり、当時とは逆方向に列車を揺られ、チェコ共和国に到着。ホロコーストの生存者の方にお会いし、地獄の控室と称されているテレジンを経て、フランス共和国に本部を構えるユネスコで終えるという、8日間ほどの旅の時間で3カ国を周る忙しい、けれども、とても贅沢なスタディーツアーでもありました。

日数的には長いようで、しかし、現地に行ってみると、あっという間に帰国の時が迫っていたという感覚でもあった今回の旅ですが、その中でも、2つのことを痛感しています。1つ目は「自身の主体性に関する反省」で、2つ目は「本物と出会うこと」です。

まず、1つ目についてですが、今回の旅は、終日、自由時間の日も組み込まれ、個人の裁量が多いツアー構成となっていました。先ほど、アウシュヴィッツから始まったと申しましたが、ツアーの1日目は観光から始まっています。各々の興味関心に合わせてグループを作って行動していましたが、正直なところ、「スタディーツアーではなく、観光ではないだろうか」という疑問や気持ちを抱えながら旅が始まりました。また、アウシュヴィッツに行った際は、「悲劇的な歴史を持つアウシュヴィッツだから心身に堪えるかもしれない」という一抹の不安も抱えていましたが、実際、訪れてみると、広島にある資料館のような犠牲者の人生が垣間見える展示を想定していたがために「ちょっと拍子抜け」と感じてしまった自分自身がいます。

観光気分や拍子抜けといった、ある種「このツアーに期待していたことと違う？」と感じてしまったのか不思議で、ツアーを経る中で考えてみました。その結果、自分自身の勉強不足や視野の狭さといった「学びに対する自分自身の主体性が足りなかった」という結論に至りました。観光気分と感じた自由行動も訪れる地域や国の特性や

歴史をもっと予習していれば文化的な学びを得られるし、アウシュヴィッツも、どの組織が運営していて、どのような民族背景があるのかということ、中立性を意識していれば、広島資料館とは、また違った学びの視点があつたと自分自身の未熟さを反省し、痛感しています。

次に、2つ目についてですが、写真や映像記録を見るのと現地で、全身を通して感じる違いを、本物と出会うことの重要性を改めて感じました。思春期頃から、戦争やホロコーストといったことに興味関心が強かったので、悲劇的な歴史を抱えている事実は知っていたのですが、当時が垣間見られる状態のアウシュヴィッツやテレジンに足を踏み入ると、一気に現実味が増し、少しの怖さ（恐さ）も感じました。特に、何気なく歩いていたアウシュヴィッツの石畳の通路は衝撃的でした。当時、収容されていた方達アウシュヴィッツするために石を運んで労働させられたという歴史を聞いて「今、自分はこの石畳の上を歩いて良いのだろうか」「失礼ではないだろうか」と、石畳の上を歩かないと仕方がないのに、モヤモヤしながらアウシュヴィッツの中を歩いていました。これは、足場の悪さや石畳の感触を自分の足の裏から感じることで、実感できることであり、本物と出会う必要性を確信することができました。

加えて、生存者の方やユネスコ職員の方からのレクチャー時でも、その重要性を感じることができ、特に前者の生存者の方からのお話では本物が持てる力を強く実感しました。壮絶な人生であったのに、彼女は最後に、複雑さも垣間見える、けれども、おどけた可愛らしい笑顔をしながら「これが（私の）紹介です。」と言いました。のシンプルな英語を用いて人生にとって重要なマインドや大切なものを語ってくれた彼女の言葉や姿が、その一言、一瞬で、私の胸に降りてきて情動が深く揺さぶられました。ツアーを通して、ここでは語りきれないほどの深い学びを得ましたが、常に主体的に学ぶ姿勢を忘れずに、たくさんの本物と出会いたいと、自分自身の人生の中で大切にしたい要素を改めて認識できた気がします。

7. 参加者事後アンケート結果

アンケート内容

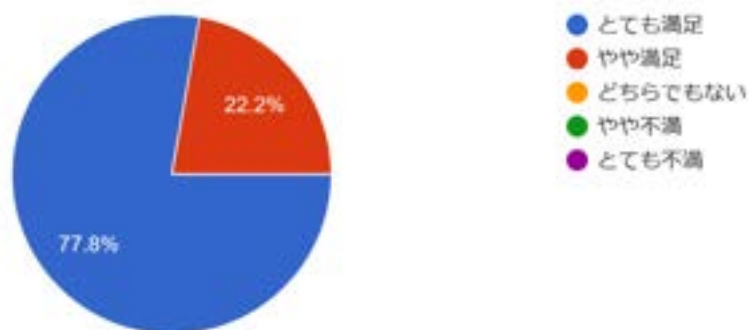
スタディーツアーを終えた後、学生を対象としたアンケートがありました。質問内容につきましては、下記の5つの通りです。ここでは、1～3についての結果を共有します。

<質問内容>

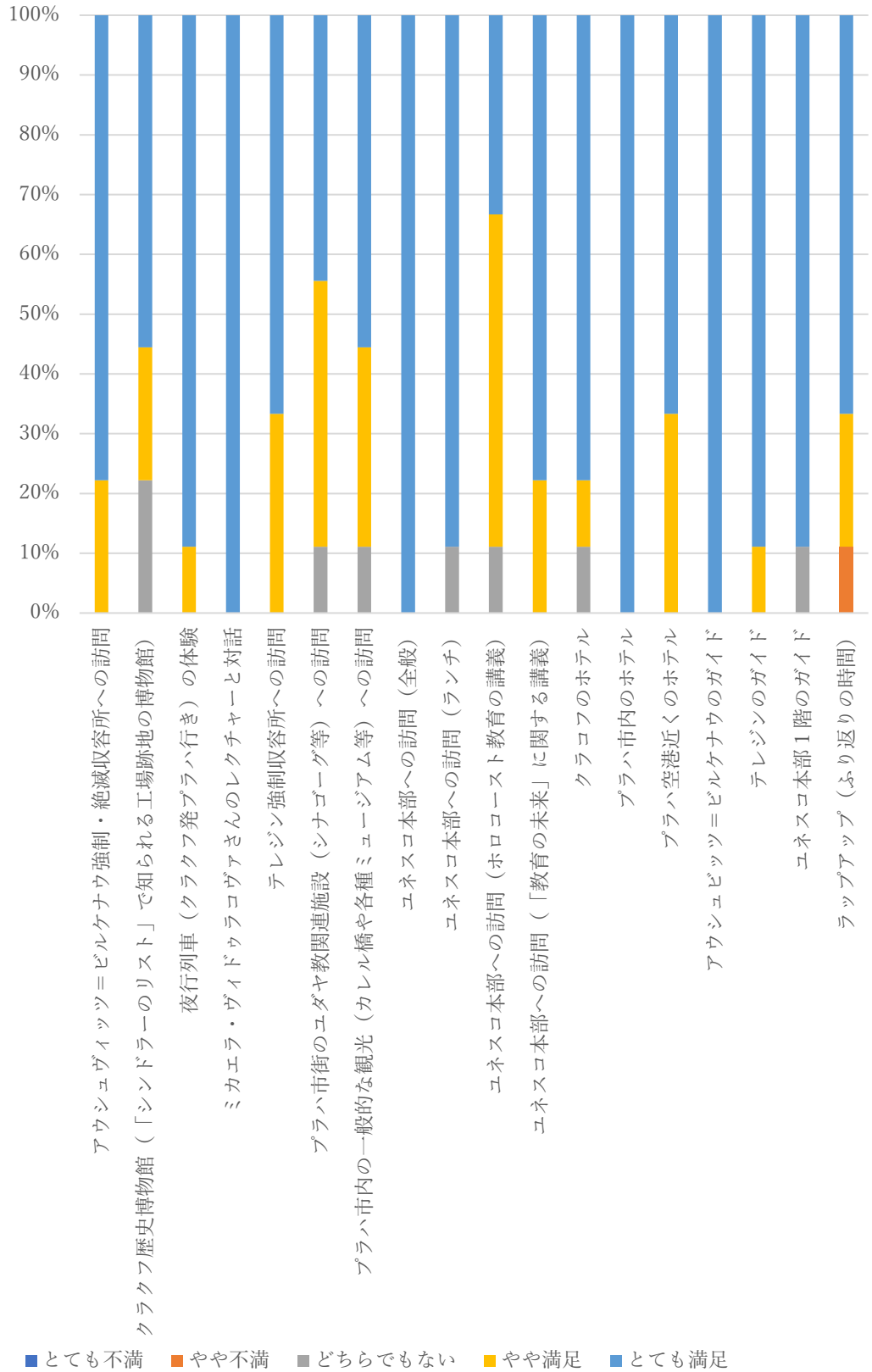
1. 今回のスタディーツアー全般の満足度を一つ選んでください。
2. 各訪問や体験の満足度を教えてください。
3. スタディーツアー全体を通して最も印象に残ったことを1つ、挙げてください。
4. 今回のスタディーツアーの改善点などがあれば、お書き下さい。
5. その他、自由に感想などをお書きください。

① 今回のスタディーツアー全般の満足度を一つ選んでください。

今回のスタディーツアー全般の満足度を1つ選んで下さい。
9件の回答



② 各訪問や体験の満足度を教えてください



③ スタディーツアー全体を通して最も印象に残ったことを1つ、挙げてください。

- アウシュヴィッツ強制収容所に訪れ、山のようになっている靴や鞄、髪の毛をみたこと。
- 人間の尊厳が保たれてこそ平和は実現するということが最も印象に残った。 アウシュヴィッツでは、ユダヤ人と収容された政治犯たちは悉く人間らしさを奪われた。それは、名前ではなく番号が与えられたことや労働力になるかならないかで命を選別したことなどどれも生命に対してして良いことではない。
- 人間が人間らしく在るには、自己表現をすることで内側へエネルギーを向けられる環境と、外の世界を知り様々な可能性を摘み取らずに多様性への受容性を育てられる環境の2つのバランスが取れているような、文化的な環境が守られていることが持続的に必要だという1つの答えに辿り着いた。だからこそアートは強い自己表現になり得るかつ、アートの題材とは関係のない赤の他人にも印象深く伝えたいことを伝えることが可能である。私は説明的な展示よりも、収容所に連れて行かれた画家たちが残した絵画を見ていたときのほうが、心が動かされていたように感じた。そしてそのメッセージを受け取るには多様な表現に心を開いていたり、文化的な教養があってこそ気づけたりするのだと思う。そしてそれを持続させるために、人は学んで尊厳を保つ環境作りをし、平和に貢献すべきと思う。
- ひと（現代に生きている人や、過去に生きていた人も含めて）と出会い、その方々の「生きざま」に触れることができたこと。
- 私はヴィドラコバさんへのインタビューが最も印象深かったです。中でも最後の私達のメッセージの中で自由と平和を手に入れること、あなた達は過去に責任を背負う必要がないと言われたことがとても印象深かったです。

- 過去と現在を繋げながら話されていた中谷さんのガイドが印象に残ってます。
帰国後に復習し、自分の中で学んだことを整理した時に、最も多く、現在や未来を考えるための種を授けてくれたような気がする。単に歴史を学びに行ったのではなく、現在や未来を考えるために私たちはヨーロッパを旅したのだと再度強く実感できるガイドだった。
- たくさんありますが、被らなそうなもので言うとチェコセンターの職員さんのお話です。
- アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制・絶滅収容所
- 生還者のミカエラさんが1時間以上にわたるお話の最後におっしゃっていたように、「本当に大切なものは1つの屋根と食べ物と飲み物、家族と友人、そして自由と平和」であり、それ以下でもそれ以上でもないということ。
- テレジン少女の家訪問とアウシュヴィッツのガス室(ムロ)

8. むすびにかえて

【邂逅】アウシュヴィッツ・テレジン

教育学科教員 水島尚喜 (美術教育学)

個人史を語ることをお許してください。

大学教員になりたての 30 歳の頃、一人の女性教師の存在をジャーナリスト野村路子さんの著作を通して知り、私は衝撃を受けました。本のタイトルは、『絵画記録テレジン強制収容所』（ほるぷ出版、1991）。「アウシュヴィッツに消えた子どもたち」が副題でした。

このプラハ郊外にあったテレジン強制収容所は、第二次世界大戦下、当時アウシュヴィッツの予備収容所として機能しており、15000 人の子どもたちがいましたが、次々に人生の最終地となるアウシュヴィッツへ移送され、生存者はわずか 100 人不足だったといえます。

死が錯綜する極限の状況の下、子どもたちは一人の美術教師に見守られながら、テレジンの薄暗い屋根裏部屋で、絵を描き続けました。教師の名前は、ユダヤ人の画家フリードル・デッカー・ブランティス（1898～1944）。あのバウハウスでパウル・クレーやヨハネス・イッテムに学び、将来を嘱望された才能豊かな女性でした。彼女は、コルチャック先生同様にナチスからの逃亡の誘いを断り、収監前には子どもたちと収容所内で造形活動を行うために必要なクレヨンや染めたシートをスーツケースの中に詰め込みます。教育行為そのものが禁じられていた強制収容所の中で、子どもたちはデッカー先生の温かい眼差しの中で、以前の家族との団欒や楽しい思い出、遊び、おとぎ話など、多彩なモチーフを描いています。これらのモチーフは子どもたちが他律的に描かされたものではなく、描かずにはいられなかった自身の願いや思いなどの想像が生き生きと脈打っています。

私は、テレジンで描かれた絵に子どもの表現の根源的な意味が埋め込まれていることを感じ、それ以来その行為の意味を考えるようになりました。すなわち描くことは自らの感覚や想像力を駆使し、形や色、手触りなどによって、自己存在や生の意味を確認することであり、生の喜びの体現であることを思うようになりました。非人間的な過酷な現実を前にしながらも、未来への夢や願いを思い描くことは、単なる現実逃避ではなく、生きることそのもののアクチュアリティであり、生のリアリティでもあるということ。現地訪問は、それらの「検証」の場ともなりました。

テレジンの子どもたちの状況を現代の子どもたちの状況を直接比較することはできません。しかしながら、子どもが自らの思いによって、表現活動すること、すなわち表現の主体として子どもの存在を考えることは、当たり前のことではありますが、普遍的な課題として問われ続けなければなりません。教育的ファシズムは現在も存在しているからです。特定の表現技術の強制、定型化された指導、内的な必然性を伴わないモチーフ内容、子どもの表現に対するドグマなど、数え始めるとキリがありません。感性の収容所は、現在も存在しているのです。

今回のスタディーツアーでは、アウシュヴィッツのガス室に残された爪痕など、想像を絶する歴史的事実も直接目にしました。しかしながら、テレジンの子どもの絵のように人類の希望を示す多くの事例にも出会いました。そのような出会いを通して、学生の皆さん、ツアーを主催された永田先生、若い教師時代に感じた私自身の感性もが、共振しはじめ、何ものかを生み出そうとするダイナモになりつつあることを強く感じています。

近年、読み書き能力の障害事例として「ディスレクシア」が話題となりますが、一方では「アファンタジア」という内的なイメージが持てない人たちの世界的増加が伝えられています。体験や目にした風景をイメージとして展開できない、それはすなわちコミュニケーションの基盤に関わる問題とも捉えることができます。今回のスタディーツアー

一での体験が、参加した学生諸氏、教員の自己変容をもたらしたことは勿論のこと、それらが水紋のように広がっていくことをイメージしています。一人の人間の経験は、人類全体の経験の総体にも連なっているからです。



“Untitled, No.2”, 2023 Naoki Mizushima

平和と戦争を考える欧州スタディーツアー2023 報告書
Overseas Study Program with Special Focus on
“War and Peace”
～Reimagining Our Future’s Together
from the Past and Present～

2023 年 11 月発行 聖心女子大学現代教養学部教育学科

〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-3-1 永田佳之研究室
編集：聖心女子大学 2023 年度欧州スタディーツアー参加者一同

لما كانت الحروب تتولد في عقول البشر، ففي
عقل لهم يجب أن تنشأ حصون السلام.

למה שהחברות של בני האדם
היא תלויה במחשבתם.

Les guerres prenant naissance dans l'esprit des hommes,
il est dans l'esprit des hommes que doivent être élevées les défenses de la paix.

SINCE WARS BEGIN IN THE MINDS OF MEN,
IT IS IN THE MINDS OF MEN THAT THE DEFENSES OF PEACE MUST BE CONSTRUCTED.

战争起于人之思想，故务需于人之思想中筑起保卫和平之屏障。

Puesto que las guerras nacen en la mente de los hombres,
es en la mente de los hombres donde deben erigirse los baluartes de la paz.

चूँकि युद्ध लोगों के मन में शुरू होते हैं, लोगों के मन में ही शांति के दुर्ग खड़े करने होंगे।

Le guerre avendo origine nello spirito degli uomini,
è appunto nello spirito degli uomini che devono essere innalzate le difese della pace.

NASCENDO AS GUERRAS NO ESPÍRITO DOS HOMENS,
E NO ESPÍRITO DOS HOMENS QUE DEVE ERIGIR-SE A DEFESA DA PAZ.

Мысли о войне возникают в умах людей, поэтому в сознании людей
следует укреплять идею защиты мира.

Convention relative aux Règles de la Guerre et aux Règles de la Guerre - Convention relative aux Règles de la Guerre et aux Règles de la Guerre